

HP原稿案

～幼・小・中連携教育の取り組み～

竹早地区幼・小・中連携研究会

1. 竹早地区連携の歩み
2. 研究組織
3. 研究の取り組みと成果
①「主体性」と竹早地区が目指す「子ども像」
②子どもの変更を見とる4ステージ・8ステップ表
③データベース化の取り組み
④連携カリキュラムの構想

1. 竹早地区連携の歩み

国立大学の法人化に伴う大学改革の中で提唱された中期計画・中期目標は、2004（平成16）年度から2009（平成21）年度にわたる6年間をかけて実施されることになった。各附属学校には特色ある地区を作り上げるための研究が求められ、竹早地区では幼・小・中連携教育の研究を設定した。

ところで、竹早地区幼・小・中連携の歴史は古く、1986（昭和61）年の竹早団地再開発計画（幼・小・中の校舎改築計画）までさかのぼる。その後脈々と続いた歩みは、大きく五期に分けることができる。これを、以下に示す

(1) 第一期 1986（昭和61）年～1990（平成2）年

「竹早団地再開発計画」が発足し、東京学芸大学施設部と共同で検討が始められた。この構想に求められた理念は次のようであった。

- ・附属学校としての使命と機能を有する施設
- ・新しい幼小中一貫教育を創造し推進できる施設
- ・時代の変化に対応した学校教育を具現化できる施設
- ・地域の特色を最大限生かした教育施設

現在本大学が定める中期目標・中期計画にある内容がすでに盛り込まれていた。

(2) 第二期 1991（平成3）年～1995（平成7）年

この時期は大きく分けると、2つの取り組みがなされている。それは、校舎改築後の幼小中連携の教育の検討開始と、竹早地区の将来構想の策定である。それぞれの取り組みの具体的内容は次のようである。

1) 校舎改築後の幼小中連携の教育「竹早地区連携教育プラン」の検討開始

- ・文部省（当時）の研究開発の委嘱を受けた幼小連携研究発表
- ・小中連携カリキュラムの検討開始
- ・教育ソフトウェアの検討開始

2) 竹早地区の将来構想の策定

- ・幼小中将来構想委員会発足

- ・交流活動の実践研究
- ・接続期の段差に関する研究と教育課程の開発推進

校舎改築後の連携を見据えた具体的な課題に目が向けられ始めた時期であった。

(3) 第三期 1996（平成8）年～2000（平成12）

1995（平成7）年に予算が決定し、翌年から中学校棟の建設が始められた。校舎完成は1997（平成9）年である。校舎改築に際し、重要視した点は次の2点である。

- 1) 教科教室を重視した校舎
- 2) 一部を踏まえた校舎

特に、全ての教科について教科教室が設置され、例えば、理科室は3教室が設置されるなど、各教科の特性に対応した授業環境が整えられた。また、小学校と中学校の共用部分を設け、効率的で交流が容易な環境整備に配慮がなされた。

1996（平成8）年に予算が決定し、翌年から小学校棟の建設が始められた。体育館・プールを除く校舎の完成は1999（平成11）年である。校舎改築に際し、重要視した点は次の3点である。

- 1) 小学校棟と中学校棟がつながった一体化校舎
- 2) オープンスペースを重視した校舎
- 3) 一部供用を踏まえた校舎

特に、普通教室は仕切りをなくし、オープンスペースを重視した校舎の造りになっている。この時期は小中一体化校舎が完成し、幼小中連携のハード面が整えられた時期であった。

(4) 第四期 2001（平成13）年～2005（平成17）年

この時期は、本格的に幼小中のソフトの部分に目を向け、今後の竹早地区の研究の土台作りに力を注いだ時期である。異校種間の連携・一貫教育を実践している多くの学校が経験する問題や課題を、本地区でも体験した。

この時期は、次に示すように、毎年のように新たな課題改善に取り組んだ。

- 1) 「幼小中の新しい連携のあり方」プロジェクト発足（2002）
- 2) 竹早地区の研究テーマ・体制・組織の決定と実践—プロジェクト報告書作成—（2003）
- 3) 3分科会体制による本格的な実践—中期目標・中期計画の推進—（2004）
- 4) 幼小中合同公開研究会実施—主題「主体性を育む幼・小・中連携の教育」—（2005）

2005（平成17）年に3校園の教育目標に共通するキーワードとして、現在の連携研究の基礎となる「主体性」を位置づけることができた。幼・小・中の全教員が、各校種の子どもたちが主体性を発揮している姿について話し合い、そこから11年間の成長に見られる特徴的な過程を大きな4つのステージと小さな11のステップとして捉えた。

(5) 第五期の取り組み

2006（平成18）年～2012年（平成24年）までが第五期にあたる。この時期の活動をまとめると次のようになる。

① 前期 2006（平成18）年～2008（平成20）年

- 1) 竹早地区の新たな連携体制・組織作り—「トップマネジメント経費」の承認—（2006）
- 2) 幼小中合同公開研究会実施—副題：幼・小・中の接続期に着目して—（2007）
- 3) 幼小中合同公開研究会実施—副題：第2・第4ステージに着目して—（2008）

第四期の課題を受けて、それまで未解決であった「主体性」の定義や「竹早地区が求める子ども像」の共通理解がなされた。また、11年間の成長に見られる特徴的な過程を、4ステージ・11ステップから4ステージ・8ステップに改めた。

② 後期 2009（平成 21）年～2012（平成 24）年

2009（平成 21）年度は中期計画・中期目標のちょうど節目にあたり、新たな目標である「連携カリキュラム」発表のために、以下のような活動に取り組んだ。

- 1) 幼小中合同公開研究会実施－副題：実践に基づく連携カリキュラムの構想－（2009）
- 2) 幼小中合同公開研究会実施－副題：連携カリキュラム創出のプロセス－（2010）
- 3) 幼小中合同公開研究会実施－副題：連携カリキュラムを支える取り組み－（2011）
- 4) 幼小中合同公開研究会実施－副題：連携カリキュラムの提案－（2012）

この時期は、先述した、いわば竹早地区に通う子どもの発達段階を表すステージ・ステップと、各教科・領域の内容との関連に焦点を当て、幼・小・中 11 年間を見通した竹早地区連携教育の全体像をまとめる活動に取り組んだ。具体的に、幼小中連携カリキュラムを完成することが最終目的であった。

2. 研究組織について

研究体制は、課題解決を目指し少しずつ変えてきたが、平成 25 年度から、図 1 のように理論・調査事例の観点から連携教育を研究する「発達研究部会」と保育・活動・授業等、教育実践から連携教育を研究する「実践研究部会」の 2 部会構成になっている。発達研究部会の成果が実践研究部会に反映され、実践研究部会での実践が、発達研究部会での研究によって裏付けられるようになっている。

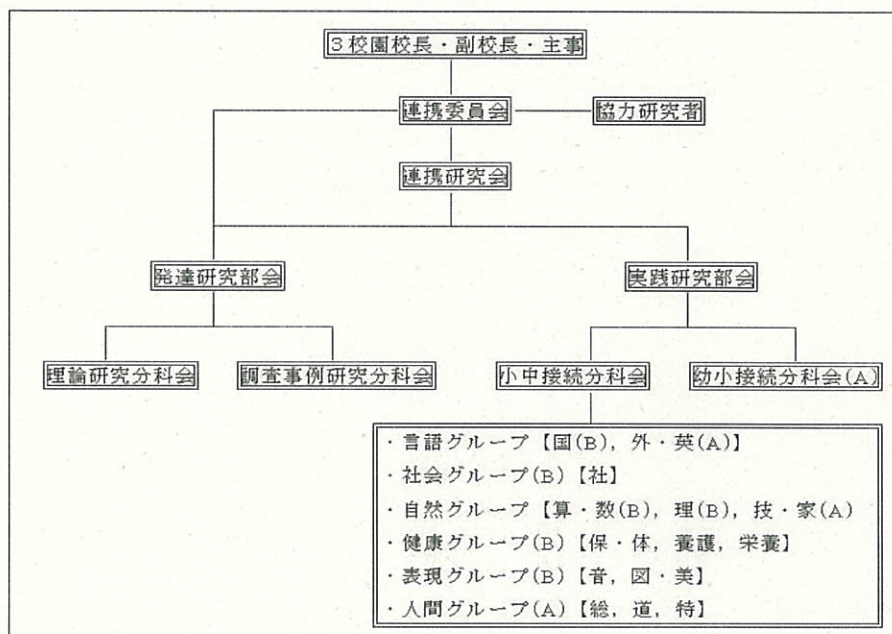


図 1 平成 25 年度の研究組織（2010）

3. 研究の取り組みと成果

(1) 「主体性」の定義と、竹早地区が目指す「子ども像」

現在の研究主題に3校園の学校目標に共通するキーワードとして「主体性」が位置づけられてきた。この「主体性」については次のように定義している。

○「主体性」とは「子どもがよりよく生きるために、自分（あるいは集団）の願いに基づき、自らの意志・判断で行動しようとする姿勢や態度」と定義する。

○竹早地区が目指す子ども像

幼・小・中が連携教育を通して目指すべき内容については、次のように確認し共有してきた。それは、次のようである。

「主体的に学び続ける人として成長する園児・児童・生徒の育成」

(2) 主体性が育まれた姿から見る子どもたちの変容のステージとステップ

第五期前期の研究成果である「主体性が育まれた姿から見る子どもたちの変容のステージとステップ」は、図2のように4ステージ・8ステップの形でまとめられた。

校種	幼稚園		小学校						中学校		
	4歳	5歳	1年	2年	3年	4年	5年	6年	1年	2年	3年
ステージ	第1ステージ 4歳～小2前期 やりたいことを思う 存分やろうとする		第2ステージ 小2後期～小4前期 集団と自分との 関わりにひたる			第3ステージ 小4後期～中1 集団との関わりの中で 自分とは何かを意識する			第4ステージ 中2～中3 集団の中で 自分らしさを追究する		
ステップ	ステップ 1 4歳～ 5歳前期		ステップ 3 小1後期～ 小2前期			ステップ 5 小4後期～ 小6前期			ステップ 7 中2		
	ステップ 2 5歳後期～ 小1前期		ステップ 4 小2後期～ 小4前期			ステップ 6 小6後期～ 中1			ステップ 8 中3		

図2 成長の4ステージ・8ステップ

① 第1ステージ（幼稚園から小学校2年生前半まで）

「やりたいことを思う存分やろうとする時期」であり、安心感や親しみを抱く中で、友達や遊びへの関心の広がりが見られる。

② 第2ステージ（小学校2年生後期から小学校4年生前期まで）

「集団との関わりに浸る時期」であり、時には自己主張をしながら積極的に友達関係を広げ、仲間との学び合いを楽しむ、まさに“小学生らしい”姿を見せる。

③ 第3ステージ（小学校4年生後期から中学1年生まで）

「集団と自分との関わりの中で、自分とは何かを意識する時期」であり、集団の中で自分らしさを求め、新しい知識や技術をどんどん吸収しようとする姿を見せる。

④ 第4ステージ（中学2年生から中学3年生まで）

「集団の中で自分らしさを追求する時期」であり、心と体が不安定になり戸惑いを見せることもあるが、自己の適性を客観的に見つめ目的をもった主体性が芽生えてくる時期である。

(3) データベース化の取り組み

本地区の研究を多くの先行研究や理論研究と比較してきた理論研究分科会や、子どもの主体性が育まれているかを確認するために抽出生徒への聞き取り調査などに取り組んできた調査事例研究分科会の活動は地道な作業であった。こうした取り組みを支え、効率よく進めるために、「データベース化の構築」という活動に取り組んできた。産学協同による幼・小・中の子どもの情報をデータベース化する構想は、図3のようにまとめられている。少しずつではあるが実現性が見えてきている。

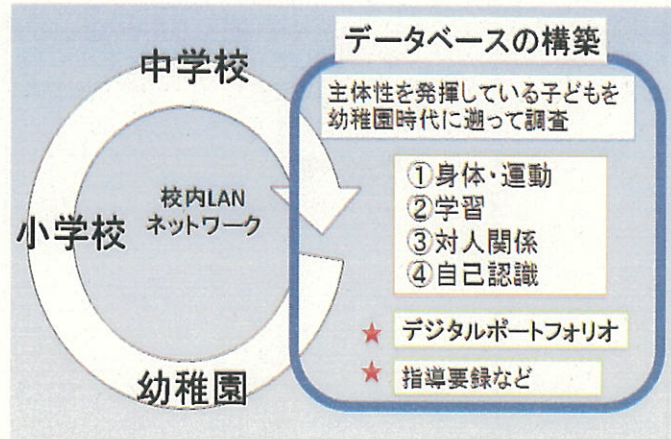


図3 データベース化の構想（2010）

(4) 連携カリキュラムの構想

本地区における「連携カリキュラム」は、主体性を育む」ことをテーマに掲げている。そして、基本的な形式として、縦軸には共有する子ども観、すなわち、4ステージ・8ステップを時系列に配置する（図4）。

その上で、横軸は11年間を通して、子どもを見とる視点をグループ・教科ごとに設定している。

具体例として、理科の連携カリキュラムを以下に掲載する。

カリキュラムの枠

ステージ	ステップ				
1	1				
	2				
	3				
2	4				
3	5				
	6				
4	7				
	8				

各教科領域等で独自の設定

各教科領域等で共通

図4 カリキュラムの枠

【理科連携カリキュラム 一部抜粋】

①小学校B領域の一部

小学校B領域

学年	ステップ	教科から見た子どもの特長と 配慮事項	学習目標	主な分野の範囲と内容 ①自然現象への関心・意欲・態度 ②科学的な思考・表現 ③観察・実験の技能 ④自然現象についての知得・理解	中・高・大の科を 自由選択し、学習してきた経験・学習成果が土台と自然 な形で活用できるように、自然の現象・観察について、自然現象の観察 を例、内容を工夫、アプローチを工夫。	キーワード	生命 の構造と 機能	生命 の多様性 と進化	生命 の連続 性	生命と 環境の かかわり	地球 の内層	地球 の表面	地球 の周辺
小学校第3学年	ステップ1	教科から見た子どもの特長と 配慮事項	学習目標	主な分野の範囲と内容 ①自然現象への関心・意欲・態度 ②科学的な思考・表現 ③観察・実験の技能 ④自然現象についての知得・理解	中・高・大の科を 自由選択し、学習してきた経験・学習成果が土台と自然 な形で活用できるように、自然の現象・観察について、自然現象の観察 を例、内容を工夫、アプローチを工夫。	キーワード	生命 の構造と 機能	生命 の多様性 と進化	生命 の連続 性	生命と 環境の かかわり	地球 の内層	地球 の表面	地球 の周辺
小学校第3学年	ステップ2	教科から見た子どもの特長と 配慮事項	学習目標	主な分野の範囲と内容 ①自然現象への関心・意欲・態度 ②科学的な思考・表現 ③観察・実験の技能 ④自然現象についての知得・理解	中・高・大の科を 自由選択し、学習してきた経験・学習成果が土台と自然 な形で活用できるように、自然の現象・観察について、自然現象の観察 を例、内容を工夫、アプローチを工夫。	キーワード	生命 の構造と 機能	生命 の多様性 と進化	生命 の連続 性	生命と 環境の かかわり	地球 の内層	地球 の表面	地球 の周辺
小学校第4学年	ステップ3	教科から見た子どもの特長と 配慮事項	学習目標	主な分野の範囲と内容 ①自然現象への関心・意欲・態度 ②科学的な思考・表現 ③観察・実験の技能 ④自然現象についての知得・理解	中・高・大の科を 自由選択し、学習してきた経験・学習成果が土台と自然 な形で活用できるように、自然の現象・観察について、自然現象の観察 を例、内容を工夫、アプローチを工夫。	キーワード	生命 の構造と 機能	生命 の多様性 と進化	生命 の連続 性	生命と 環境の かかわり	地球 の内層	地球 の表面	地球 の周辺

②中学校A域の一部

中学校第1分野

学年	ステップ	教科から見た子どもの特長と 配慮事項	学習目標	主な分野の範囲と内容 ①自然現象への関心・意欲・態度 ②科学的な思考・表現 ③観察・実験の技能 ④自然現象についての知得・理解	中・高・大の科を 自由選択し、学習してきた経験・学習成果が土台と自然 な形で活用できるように、自然の現象・観察について、自然現象の観察 を例、内容を工夫、アプローチを工夫。	キーワード	エネルギー の 見方	エネルギー の 変換と 保存	エネルギー の 利用	電子 の 存在	電子 の 結合	電子 の 特性	電子 の 応用 エネルギー
中学校第1学年	ステップ1	教科から見た子どもの特長と 配慮事項	学習目標	主な分野の範囲と内容 ①自然現象への関心・意欲・態度 ②科学的な思考・表現 ③観察・実験の技能 ④自然現象についての知得・理解	中・高・大の科を 自由選択し、学習してきた経験・学習成果が土台と自然 な形で活用できるように、自然の現象・観察について、自然現象の観察 を例、内容を工夫、アプローチを工夫。	キーワード	エネルギー の 見方	エネルギー の 変換と 保存	エネルギー の 利用	電子 の 存在	電子 の 結合	電子 の 特性	電子 の 応用 エネルギー
中学校第1学年	ステップ2	教科から見た子どもの特長と 配慮事項	学習目標	主な分野の範囲と内容 ①自然現象への関心・意欲・態度 ②科学的な思考・表現 ③観察・実験の技能 ④自然現象についての知得・理解	中・高・大の科を 自由選択し、学習してきた経験・学習成果が土台と自然 な形で活用できるように、自然の現象・観察について、自然現象の観察 を例、内容を工夫、アプローチを工夫。	キーワード	エネルギー の 見方	エネルギー の 変換と 保存	エネルギー の 利用	電子 の 存在	電子 の 結合	電子 の 特性	電子 の 応用 エネルギー
中学校第1学年	ステップ3	教科から見た子どもの特長と 配慮事項	学習目標	主な分野の範囲と内容 ①自然現象への関心・意欲・態度 ②科学的な思考・表現 ③観察・実験の技能 ④自然現象についての知得・理解	中・高・大の科を 自由選択し、学習してきた経験・学習成果が土台と自然 な形で活用できるように、自然の現象・観察について、自然現象の観察 を例、内容を工夫、アプローチを工夫。	キーワード	エネルギー の 見方	エネルギー の 変換と 保存	エネルギー の 利用	電子 の 存在	電子 の 結合	電子 の 特性	電子 の 応用 エネルギー